

山口昌男(1931-)

『文化と両義性』岩波書店、1975

山口昌男5冊目の単著。20世紀1970年代日本の文科系の知の風景を一変させた山口昌男の、理論的主著。その1年前には『歴史・祝祭・神話』(1974)、そして1か月後に雑誌『文学』に連載されていた一連の論稿が『道化の民俗学』(1975)として上梓。このふたつの仕事のあいまに、岩波編集部のお庭俣より哲学叢書の一冊を要請され、ティモール調査直前の1か月半ほどで脱稿したのが本書だ、と著者は語る[山口 2003: p. 69]。神話空間のみならず、実際の歴史空間にあっても、舞台上に乱舞し、登場人物を嘲弄し観客まで巻き込んで挑発した悪戯者たちは、舞台の秩序を乱しながら、ときに舞台の権力に調伏され、ときに抑圧をかい潜って復活する。その背後にある舞台装置を、哲学的装いも豊かに解析し、絢爛たる理論絵巻に描きあげた原論立立て。それが『文化と両義性』の位置付けといえよう。

本書は第1章冒頭で日本の『風土記』を取り上げ、為政者の築く秩序とその周縁部との葛藤を提示し、周縁部に災厄を閉じ込める祭祀等による、中心と周縁との相互作用が、より高次元の象徴的秩序構築に不可欠な様を分析する。つづく第2章は議論の対象領域を拡大し、ケネス・バーク(Kenneth Burke)やエドモンド・リーチ(Edmund Leach)らを用いつつ、秩序内部の「腫れ物」を犠牲として捧げる、という「否定」を契機として、中心秩序と周縁との相互関係が修復されるという、秩序回復の原型的循環的・弁証法的構造を探り当てる。第3章では議論を記号論、言語論に拡大しつつ、周縁部の宿す曖昧さを「多義性」といった言語学用語と結び付ける。安定した社会的規範からはみ出す余剰として、ヴィクター・ターナー(Victor Turner)が提唱する「コミュニティ・comunitas」, さらに言語学者トルベツコイ(N. Trubetskoi)のいう「微つき」、すなわち、ことさらに区別され指弾される他者性の符丁が紹介される。そして日常を逸脱して反社会性を刻印された記号の要素による、中心的秩序への異議申し立て(ケネス・バークの「反・定言」)を介して、日常性が再活性化される機構のありかが示される。この文脈で美術史のユルジス・バルトルシャイティス(Jurgis Baltrušaitis)、宗教史のミシェル・ド・セルター(Michel de Certeau)、社会学のジークムント・バウマン(Zygmunt Bauman)など、当時日本ではまだ知

名度も低く、人類学とは離れた領域の論者が的確に援用され、柳田國男から宮田登にいたる日本の民俗学研究の事例と対決される。

第4章「文化と違和感」は、ジュクン Jukun 族の神話分析がミシュレ(Jules Michelet)の『魔女』へと接続されており、1960年代末からの著者の西アフリカからパリを経由する経験を濃厚に宿している。そこに展開されるのは、文化は己を「文化」たらしめるがために、「違和感」を捏造する宿命にあり、そうした「排除の原則」や「犠牲者のでっちあげ」は、狂気というよりも、むしろ理性の必然的な片割れである、との冷めた認識だ。「加害者」が実は「被害者」であって、「被害者」と自己を同一化する共同体側が「加害者」を作り出さねばならないという事情。これは、分類に抵触する要素が禁忌として排除されるとするメアリー・ダグラス(Mary Douglas)への批判をなす。1990年代以降、記号学の退潮に代わって、女性論や文化研究が隆盛を見た。ひたすら良心を代弁して論敵を糾弾し、自己懲罰による倫理的正義が標榜されたが、結果として、「犠牲の山羊」の再生産に加担してしまう傾向を呈した。山口のダグラス批判には、先回りしてこの悪循環を早々と予見していた著者の、中心と周縁の弁証法に対する、明晰かつ周到な判断が、横溢する。

つづく第5章では、「生活世界」の哲学を提唱した現象学者フッサール(E. Husserl)の弟子筋にあたり、北米合衆国に移住して現象学的社会学を提唱したアルフレート・シュッツ(Alfred Schütz)が中心に論じられる。現実にも昼は銀行家、夜は学者という二重生活を営んだシュッツは、現実の重層性を強調し、そのなかでひとつの現実の層/相のみを妥当するものと捉える態度は、「妥当性」そのものへの検討放棄、すなわち判断中止(エポケー)を伴わずにはいないことを確認する。ここから必然的に生じる「空白地帯」を山口は、アルトール(A. Artaud)の「残酷性の演劇」やヴィトケーヴィッチ(U. Witkiewicz)の「存在の秘儀性」が示そうとした次元と結び付け、ミハイル・バフチン(Mikhail Bakhtin)の言うカーニヴァルの祝祭が実現する非日常空間の現象へと接ぎ木する。さらに、シュッツを継いだペーター・バーガー(Peter Berger)のロベルト・ムジル論を導き、「特性のない男」の描く重層空間へと話題は進む。現代生活の技術連関は個人をして「統計学的解体」とでも言うべき疎外へと

追いつめ、それと格子を隔てるように、相互結合からなる無限包容の全体性、両性具有や遊戯性を宿した両義的な空間が出現する。

政治的秩序の裏には、混沌が背中合わせに控えている。この認識が、つづく第6章でケネス・バーク、ヒュー・ダンカン(Hugh D. Duncan)らの政治人類学者の学説と対峙される。とりわけ夢に周縁的現実が投射されるとの考えは、フッサールの手稿を調査したエンツォ・パッチ(Enzo Paci)などから汲まれる。現象学は「志向性」を重視するが、過去への志向、未来への志向の網の目のうえに現在の意識が織り上げられる。晩年のフッサールの思考がフロイト(S. Freud)と接点をもっていた可能性を示唆する部分だが、パッチが歴史を「非活性的物事に対する不断の戦いである」と見るのを山口は読み替える。時間的に非活性と見える領域こそ、人間の有限性を越える無限の可能性を秘めている、と。さらにオルテガ(Jesé Ortega y Gasset)が西欧の「周縁部の出身」であったことを説く荒川幾男の認識を援用した山口は、空間的な活性化の有効性にまで話題を広げ、辺境のもつ可能性を訴える。「暗黙知の次元」の著者マイケル・ポランニー(Michael Polanyi)への献呈論文「中心と周縁」の著者エドワード・シルズ(Edward Shils)はマッカーシー旋風のなかで赤狩りの側に立ち、ノーマン(E. H. Norman)に不利な証言を提供した政治社会学者、と山口は認識するが[山口 2003: p. 53]、周縁が中心の行政・象徴体系に組み込まれる過程を論じるシルズ論文に不満な山口は、これを換骨奪胎し[山口 2001: p. 16]、アルノルト・ファン・ヘネップ(Arnold van Gennep)の『通過儀礼』から過渡性 liminality の概念を汲んだヴィクター・ターナーに与して、「構造的劣勢」すなわち「異人性」に潜む反・秩序の非対称的補完作用を重視する。中心的価値から隔たっているだけに、かえって強烈に情緒の共同体(「コミュニティ」)を作る例として、「日本の長屋」が登場するの示唆的だ。

支配的な秩序に対する疑いは、秩序からの退行として現れる。これを「攻撃的退行」と名付ける山口は、第7章において、トゥイニャーノフ(Yurii Tynyanov)、ムカジョフスキー(Jan Mukařovský)ら、プラハ構造主義に依拠し、「主調(ドミナント)」の司る作品の内的統一性には、それに対する抗争や矛盾という否定的関係によって保たれる、という理論に注目する。ここで

フレーブニコフ(Velemir Khlebnikov)の「最も新しいロシアの詩」が、シクロフスキー(Victor B. Shklovskii)の言う「非日常化(オスタラネーニエ)」と連結されているのも見逃せない。惰性的慣習への詩的言語による侵犯行為によって日常言語を「生気づけ」、多層的な現実を復元させ、その深みと広さを宿した全体性を回復させよう。そうした芸術的前衛の夢=ユートピアの符丁の下に本書が構想された、と悟られるからである。

「中心/周縁」は一躍流行語となったが、様々な批判も被った。本書は中心の活性化と制度強化のために周縁が体よく利用されていることを理論的に裏書きしただけだ、という蓮實重彦に帰せられる見解が典型的だ[山口 2003: p. 51]。権力の中心を脅かす可能性を秘めた周縁が、かえって中心を再活性化する。この山口理論は、畢竟、中心の強化を是認する体制派に与するものだ、との批判もある。それに対して、こうした批判は全共闘=団塊世代に特有の、硬直化した反権力志向の露呈、とする再反論もある[大野 2001: p. 102]。さらに、英文でも出版され国際的にも知られた中根千枝の『タテ社会の人間関係』の傍らで、「長屋」的非権力の水平構造を言説く山口理論は、著者をこれ以降文化人類学から遠ざけ、内田魯庵ら明治の権力中枢の周縁に屯した落ち零れ文化人たちの歴史人類学へと退却させた、との説もある。「挫折」昭和史(1995)の満州神話的空間分析、「敗者」の精神史(1995)の明治社会裏面情報網の解析へと展開されてゆく系譜である。だがそれは、1975年段階の山口の理論的志向=思考に、既に胚胎していた「攻撃的退行」ではなかったか。最後に付言すれば、本書の思想的核は、その後筆者が発表した英文論文“Center and periphery in the culture”(Broms, Henri & Rebecca Kaufmann, eds., *Semiotics of Culture*, Helsinki: Arator, 1988)にまとめられ、ソ連・タルトゥー学派への著者の精通ぶりも含め、記号学における国際的な射程をもつ理論的貢献として、ひろく認知されている。●稲賀繁美

[参考文献]Imafuku Ryuta. “Masao Yamaguchi: a Hermes Harlequin in the field of semiotics”. *The Semiotics Web*. 1987 (今福龍太著/斎藤文子訳「記号論のヘルメス・ハーレクイン」『へるめす』第23号, 1990)。大野秀『魯庵山脈登攀日記』山口昌男山脈 私家版, 2001。『山口昌男ラビリンス』国書刊行会, 2003。今福龍太「解説」『山口昌男著作集』第5巻, 筑摩書房, 2003。

## 文化人類学文献事典

---

平成16年12月15日 初版1刷発行

編者 小松和彦・田中雅一・谷泰・原毅彦・渡辺公三

発行者 鯉渕年祐

発行所 株式会社 弘文堂 101-0062 東京都千代田区神田駿河台1の7

TEL 03(3294)4801 振替 00120 6 53909

<http://www.koubundou.co.jp>

装丁 笠井亜子

印刷 三美印刷株式会社

製本 牧製本印刷株式会社

---

© 2004 Printed in Japan

凡 本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上の例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03 3401 2382）にご連絡ください。

ISBN4-335-56101-6

---